

【論文】

伊東市竹の台遺跡出土墨書土器の再評価

—式内社葛見神社神戸集落の検討—

勝又 直人

要旨 静岡県伊東市竹の台遺跡は、伊豆国田方郡久寝郷内の集落遺跡で、奈良～平安時代の遺構・遺物が多く確認されたことで知られている。平成元年の伊東警察署庁舎建設に伴う発掘調査の結果、竪穴住居跡の覆土から多くの土師器坏等が焼土と共に廃棄された状況で確認された。本稿では、この調査で見出された祝関係の墨書土器から、当該集落遺跡は近接する式内社葛見神社の神戸集落である可能性を検討した。また供膳具が多く廃棄された状況から、『令集解』儀制令春時祭田条等にあるような人々が社に参集し飲酒を行うことを基軸とする共同飲酒儀礼や、祭祀後の直来に可能性を求め、墨書土器「忍□〔界カ〕」を僧名と解釈した場合、神前読経が行われたことを推定した。

キーワード：竹の台遺跡 墨書土器 祝 式内社 葛見神社 神戸 春時祭田条 郷飲酒礼 神前読経

1 はじめに

竹の台遺跡は静岡県伊東市岡字竹の台に所在する(図1)。この遺跡は伊東の市街地を北西に臨む台地上に位置し、標高20~25m程度の平坦地上に広がりをもち、周囲は住宅地として利用されている。遺跡の眼下には天城山地に源を発する伊東大川により形成された沖積地が広がり、現在は市街地が形成されている。この伊東市街地を臨む台地や丘陵裾部には多くの遺跡が位置し、その多くは縄文時代の遺跡である。特に戦前、國學院大学の江藤千萬樹等により調査された上ノ坊遺跡(縄文時代前期)が著名で、他に敷石住居跡が確認されている東小学校遺跡(縄文時代中期)も知られる。

遺跡が位置する伊東市岡字竹の台付近は旧国制で云う「伊豆国田方郡久寝郷」に比定される。この伊豆国田方郡は現在の静岡県東部、熱海市・伊東市・伊豆市・伊豆の国市・三島市・函南町・清水町・沼津市の一部に該当し、伊豆国北半部を田方郡が占めている。『和名類聚抄』では伊豆国田方郡の郷名を、新居・小河・直見・佐婆・鏡作・茨城・依馬・八邦・狩野・天野・吉妾・有雑・久寝以上13郷を列記する。その中に久寝(クズネ)郷が見られる。伊豆東海岸部に臨む久寝郷は田方郡の東南部に位置し、南側は賀茂郡川津郷に隣接する。この久寝郷は坂本里と坂上里で構成されたことが平城京出土木簡でも確認される。竹の台遺跡と同時期

の遺物が出土した井戸川遺跡は北西に隣接し、竹の台遺跡と井戸川遺跡一帯が久寝郷の中心集落として認識することが可能であるが、井戸川遺跡の実態は判然とせず、該期の集落景観は明らかになっていない。

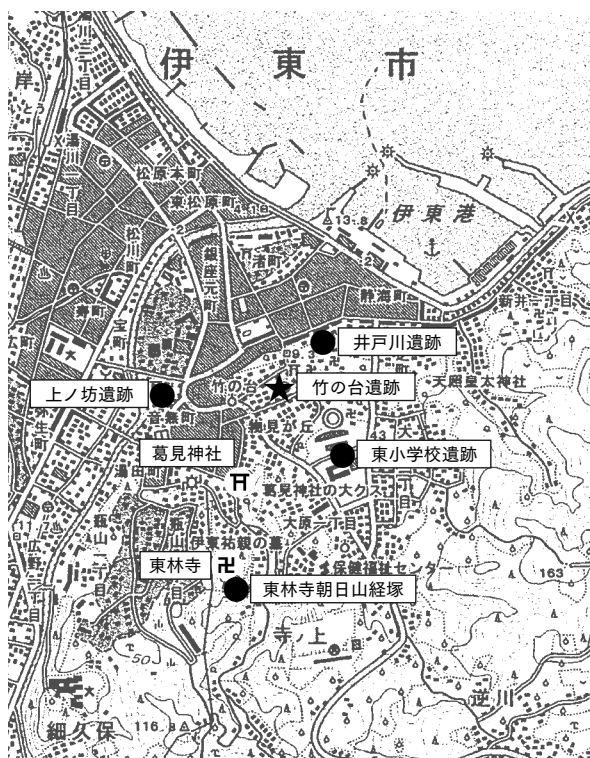


図1 遺跡位置図

この竹の台遺跡は縄文時代の遺跡としても、つとに知られていたが、昭和31年に伊東警察署庁舎建設の際の、市史編纂委員会の長田実氏・小出義治氏等による発掘調査の結果、古代の竪穴住居跡が3軒発見されている。

本稿で対象とする出土資料は、静岡県教育委員会により平成元年に実施された伊東警察署新庁舎建設に伴う調査で得られたものである。この平成元年の調査成果は報告書により既に公表されているが、出土した墨書土器を再評価することで、当該遺跡につき再認識を深めたい。検討不足の部分があるが何卒寛恕願いたい。

2 竹の台遺跡の調査成果

小論を進めるにあたり、この平成元年度の調査成果（及川・鈴木1991）をまず概観したい。当該発掘調査における調査区は1～3区が設定され、縄文時代の敷石住居跡が下層にて、また奈良～平安時代にかけての竪穴住居跡、掘立柱建物跡、溝状遺構等が縄文遺構面より上層にて検出された。遺物として縄文時代の土器・石器以外に、灰釉陶器・須恵器・土師器をはじめ、金属製品が出土している。本稿で注目する墨書土器は1区で多く出土している（図2・3）。

（1）遺構

1区における奈良～平安時代の遺構として、竪穴住居跡（SB101～103）3軒、溝状遺構（SD101）1条が検出されている。SB101は1区中央部よりやや南寄りの位置にて確認されている。住居跡北東隅部は後述するSB102の南西隅部と重複し、調査の結果、SB102より時期的に後出したと考えられる。住居の大半は1区西壁より調査区外へ延びている。北西隅部に柱穴が1基確認されている。遺物は須恵器（坏蓋・高台付坏）、土師器（坏・甕）、銚帯金具、刀子である。

SB102は1区のほぼ中央部で確認されている。SD101により北辺部を破壊されており、また東辺部も調査区外に広がるため判然としないが、長方形に近い平面形と考えられ、調査区壁面の土層堆積状況から竈の存在が推定された。壁溝は調査区東壁際に確認されている。この住居跡は検出状況から、SB101とSD101よりも時期的に先行したと思われる。遺物の出土状況において、報告では「…覆土に大量の土器等の遺物が焼土と共に含まれており…」とあり、遺物には銚帯金具や勾玉、墨書土器が含まれていたとする。住居内覆土・床面出土の土器は報告書に図化されたものだけでも66点を数

え、そのうち土師器坏52個体、埴3個体、小型甕3個体を数える。この点から住居内に廃棄された土器の主体は供膳具が主体であったことが理解される。さらに報告者は「…廃棄住居跡に何らかの意図で焼土と遺物を廃棄していたものと考えられる。廃棄は一回に行われたものではなく、何度となく漸次繰り返されていたことが堆積状況から確認された。また、遺物は焼土と共に出土しているが、直接火を受けた痕跡は見られないことから別地点から焼土と共に運ばれて廃棄されたものと考えられる。廃棄の理由については遺物の内容や堆積状況から祭祀に関連するものと推定される…」とする。出土土器の構成として灰釉陶器（壺）、須恵器（坏蓋・無高台坏・高坏）、土師器（坏・甕・埴）で、墨書された土器は土師器坏に限定される。図化された土師器坏52個体中18個体が墨書土器である。これら遺物の大半は覆土中であるため、報告書の云う通り、SB102が営まれた時期より後出するものである。

SB103は1区の北半部で確認されている。住居跡は南西隅部が検出され、大半は調査区東壁以東に延びているが、住居跡北端付近は失われている。平面形はSB101・102とは異なり住居跡は直線的で、壁溝も認められる。SB103はどの遺構とも重複関係は無く、後述するSD101より1mを満たない位置にある。従ってこのSB103とSD101は同時期に存在した可能性は低い。

SD101は1区のほぼ中央部、SB103とSB102の間に東西に横たわるように位置する。遺構東半部は調査区東壁より東へ延びる。このSD101の南辺はSB102の北辺と重複し、SB102より時期的に後出するものと推定されている。当該遺構の北側底面に斜面状の高まりが認められており、その場所に遺物の出土が見られたとされる。遺物は須恵器（坏）、土師器（坏・鉢）である（註1）。

2・3区で確認された古代の遺構は、竪穴住居跡（SB201・203・204・301）4軒、掘立柱建物跡（SH201～203）3軒、竪穴状遺構（SX201・301）2基が確認されている。報告書ではいずれも平安時代のものと推定している。1区と比較して、2・3区付近は後世の土地利用による削平や、現代の攪乱を多く受け、残存状況が不良であったらしい。この2・3区で主要な遺構はSB301・SX301・SH202である。SB301は計測値7.2m×4.6mを測り平面が長方形を呈する住居跡で、東西に長い竪穴住居跡か。北辺中央部のやや西寄りの位置と東壁中央部に竈が設えられている。この遺構は北西隅部でSX301と重複しているが、調査結果からSX301

よりも時期が後出するものと考えられる。覆土中より須恵器（坏蓋・坏・小型短頸壺）、土師器（坏）が出土している。SX301はSB301と重複し、时期的に先行するとされた遺構である。3区調査区北壁より北へ延びる遺構と考えられ、南辺は約9mを測りSB301より大きい。報告書では大型竪穴住居跡の可能性を指摘している。SH202は大型掘立柱建物跡とされるが、北側は残存不良である。検出された他の掘立柱建物跡と比較して、柱穴の平面形が方形に近く、かつ建物跡も規模が大きい点から、区別される。調査区自体が攪乱を多く受けていたため判然としないが、SH202周囲に竪穴住居跡等が近接しない点も注目される。

以上1～3区の遺構群はその設営方向から、北を指向するSB101・SB103・SB301・SH202と北西を指向するSB201・203・204、SH201・SX201、SX301に大別され、集落構成として少なくとも2段階設定することが可能となっている。

（2）遺物

平成元年における竹の台遺跡の調査成果では、前述したように出土遺物の中でも土師器坏が多数を占めている。この他にも須恵器や、極少数であるが灰釉陶器が確認されている。

竹の台遺跡における供膳形態の主体は駿東型坏である。内外面に横位のヘラミガキが施され、ロクロまたは回転台上で製作されたものと推定される。駿東型坏は池谷初恵氏（池谷1995）により坏B類に分類され、やや丸底気味の底部を有する坏B1類、平底化した底部を有する坏B2類、口径が縮小し、器高が高くなった坏B3類に細分されている。前述の竹の台遺跡1区SB102は坏B1・2類の他に、时期的に後出する坏B3類も見受けられる。これら坏B類の様相から、8世紀後半から9世紀初頭にかけての特徴を備えている。ロクロまたは回転台上で製作されなかった坏（池谷分類で云う坏A類）は一切無く、他に甲斐型坏（池谷分類で云う坏C類）が散見される。ロクロまたは回転台上で製作された点では駿東型坏と共通するも、体部外面のヘラミガキと下半部のヘラ削り、体部内面と見込み放射状の暗文が見られる等の特徴により区別がされる。甕では駿東型甕（池谷分類で云う甕A類）は姿を見せず、専ら甕B類である点の特徴である。また3区SB301では坏B3類が一定量見受けられる。坏底径の縮小化が進み、口径と底径の比率が2：1付近となるため、時期がこの坏B3類が卓越する9世紀前半代に

かかる可能性がある。以上の点から平成元年度調査で確認された土器群は池谷氏による第Ⅱ期（8世紀後半代）から平安時代にかかる限られた時期と考え、9世紀代後半の土器群は判然としなくなる。

本稿で注目し、次章で検討するのが墨書土器である。図2・3、表1に平成元年度に竹の台遺跡から出土した墨書土器を集成した。図化された資料25点のうち18点が1区SB102から出土している。大半が土師器で高台の無い無台坏で、駿東型坏である。前述したとおり所属時期は8世紀後半～9世紀初頭にかけてのものと考えられる。墨書の位置は底部外面が殆どである。2点ほど体部外面に墨書された資料がある。これまで竹の台遺跡では昭和31年の調査で「田」と書かれた墨書土器が1点出土、また近年、伊東市教育委員会が実施した竹の台遺跡の調査では「橘」「大」「牧」「久」等が出土している（時枝2009）。これらと平成元年度調査で出土した墨書土器の内容は異なる。この墨書内容は次章で検討したいと思う。

金属製品では鍔帯金具や刀子等が1区SB101・102から出土している。鍔帯金具は共に丸柄でSB101とSB102の覆土から出土している。報告では一つの鍔帯にセットのものと推定している。また報告では前述のようにSB102はSB101に时期的に先行しているとされ、廃棄された住居跡であるSB102に焼土と鍔帯金具や墨書土器を廃棄していたものとする。刀子はSB101とSB102から出土している。前者は隅の土坑からはほぼ完形資料が1点、後者は破片が2点出土する。SB102からは鉄鏝片と考えられる資料が出土する。また袋状鉄斧が1点、出土地点が未記載であるが、報告されている。SB102からは蛇紋岩製と考えられる勾玉も出土しているが、時期は判然としない。

3 墨書土器の再評価

前章では平成元年度の調査の成果を概観した。この調査で注目すべき成果は、1区SB102の覆土中から出土した墨書土器群である。本章では墨書内容毎に分析を試みる。

（1）「大家」

「大家」は1区SB102より5点出土している。また「家」2点も「大家」と同意の可能性があり、「大□」は「大家」か。他に「大」が2点出土しているが、「大家」と関連性を求めることも可能である。この「大家」は「地名」・「人名」等の可能性が想起されたが、絞り込め

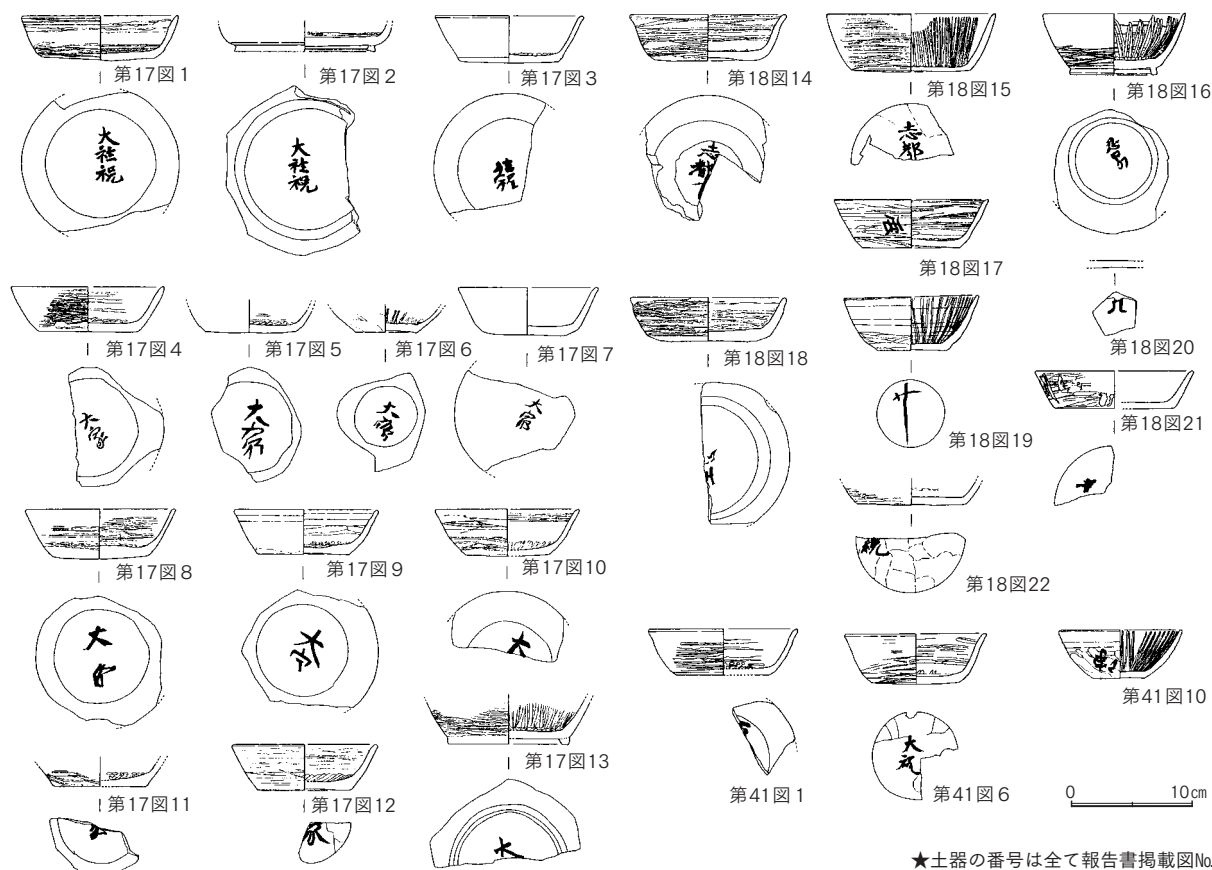


図3 墨書土器

表1 竹の台遺跡平成元年出土墨書土器一覧表

1区SB101

No.	報告書 掲載図No.	種 別	器 種	墨 書	
				内容	位置
1	第18図	土師器	無台坏	□	底部外面
2		土師器	無台坏	□	底部外面

1区SB102

No.	報告書 掲載図No.	種 別	器 種	墨 書	
				内容	位置
3	第17図	土師器	無台坏	大社祝	底部外面
4		土師器	高台坏	大社祝	底部外面
5		土師器	無台坏	社祝	底部外面
6		土師器	無台坏	大家	底部外面
7		土師器	無台坏	大家	底部外面
8		土師器	無台坏	大家	底部外面
9		土師器	無台坏	大家	底部外面
10		土師器	無台坏	大□〔家〕	底部外面
11		土師器	無台坏	大家	底部外面
12		土師器	無台坏	大	底部外面
13		土師器	無台坏	□〔家〕	底部外面
14		土師器	無台坏	□〔家〕	底部外面
15		土師器	高台坏	大	底部外面
16	第18図	土師器	無台坏	志都□	底部外面
17		土師器	無台坏	志都	底部外面
18		土師器	高台坏	忍□〔界〕	底部外面
19		土師器	無台坏	□〔雲〕	底部外面
20		土師器	無台坏	□	底部外面

1区SD101

No.	報告書 掲載図No.	種 別	器 種	墨 書	
				内容	位置
21	第18図	土師器	無台坏	□	底部外面

1区表土～旧耕作土

No.	報告書 掲載図No.	種 別	器 種	墨 書	
				内容	位置
22	第18図	土師器	無台坏	□〔祝〕	底部外面

2区西側

No.	報告書 掲載図No.	種 別	器 種	墨 書	
				内容	位置
23	第41図	土師器	無台坏	□	底部外面

3区SB301

No.	報告書 掲載図No.	種 別	器 種	墨 書	
				内容	位置
24	第41図	土師器	無台坏	大祝	底部外面

3区北半

No.	報告書 掲載図No.	種 別	器 種	墨 書	
				内容	位置
25	第41図	土師器	無台坏	□〔浄〕	底部外面

るものが無い。当該遺跡付近では「大家」と称する郷名は無く、管見に入る範囲内において武蔵国入間郡大家郷・上野国多胡郡大家郷・越後国古志郡大家郷・石見国邇摩郡大家郷・備後国安那郡大家郷・豊前国下毛郡大家郷・薩摩国出水郡大家郷等が古代の郷名として周知されるが、いずれも遠隔地のため可能性としては低い。また現在の伊東市内に大字・小字名として「大家」に該当するものは現時点では見出せない（加藤2000）。人名に可能性を求めた場合、久寝郷の住人に関する資料は平城京跡出土木簡中に求められる。木簡には津守部、日下部、矢田部、物部、若桜部が散見されるが「大家」を含む人名は認められていない（山本2007）。ここで新たな可能性として示されるのは「家号」である。原秀三郎氏は千葉県吉原三王遺跡出土事例にある墨書土器「大家」は遺跡全体を束ねる主屋と述べている（原1988）。また関和彦氏によれば『日本霊異記』・『播磨國風土記』の記載から「…同姓が多い村落では対国家関係以外の日常生活では一般的に「氏名（部姓は）」使用しなかったと考えたい…」とし、古代「家号」の存在を確認できるとしている（関1994）。この点からすれば、件の竹の台遺跡出土の墨書土器「大家」は「人名」「地名」ではなく「家号」と考えてよろしいのではないかと。「大家」はSB101・102にて鍔帯金具が出土した点を勘案すれば、集落内の有力者を示すものとする。

（２）「大社祝」「社祝」「大祝」「祝」

竹の台遺跡では第1表にもあるように「大社祝」の他に「社祝」「大祝」「祝」が確認される。この平成元年度の調査では「祝」と思しき墨書土器は5点を数える。そのうち1区SB102では「大社祝」2点、「社祝」1点が出土している。これら「祝」は神職名と考えられる。「祝」は「はふり」「ほうり」と読む。神社に奉職する神職を意味するものと考えられ、「禰宜」と同様、祭祀・社務等を担う職名と推定される。穢れを「放り去る」との意とも考えられるこの「祝」は職員令神祇官条で国司により神社の封戸である「神戸」から選び（黒板他1987）、神祇令神戸条にはこの神戸の調庸、田租が神宮造や調度に充てられると定めている（黒板他1987）。

神職である「祝」に係る出土遺物として、まず墨書・刻書土器が想起される。国内で「祝」と書かれた土器が出土したのが、山形県酒田市南興野遺跡、岩手県盛岡市細谷地遺跡、千葉県成田市台方下平Ⅱ遺跡、千葉県

香取市多田寺台遺跡、山梨県韮崎市宮ノ前遺跡、富山県小矢部市桜町遺跡、島根県出雲市青木遺跡等が知られ（註2）、これらの遺跡のうち、墨書土器と神職との関連性が理解されるのが、桜町遺跡と青木遺跡である。

桜町遺跡は越中国礪波郡長岡郷の中心地とも推定された遺跡である（久々・塚田他2003）。1987年度調査区（中出地区）のSD11より平安期と推定された「長岡神祝」「大祝」「祢宜」「大社祝」「祝」と書かれた墨書土器、斎串724点の他に灯明皿5点が出土し、報告では墨書土器が『延喜式』卷九神名帳にある「長岡神社」の神職である可能性が指摘されている。島根県出雲市にある青木遺跡は出雲国出雲郡の伊努郷・美談郷との境界付近で、遺跡からは神社推定遺構、果実埋納遺構等が確認され、神像、絵馬が出土している。また遺跡からは約600点の墨書土器が出土し、中には神社に係る墨書「美社」「神財」「祝」が散見され、『出雲國風土記』に云う「彌太彌社」「彌陀彌社」、『延喜式』卷九神名帳にある「美談神社」の可能性が指摘されている（今岡他2006）。これら2遺跡の例から墨書土器「祝」と式内社との関連性が問われている。

さて、件の竹の台遺跡の南西約300mの位置には、「葛見神社」が鎮座する（静岡県郷土研究協会1941・菱沼1981・木村1987）。伊東市域に式内社に比定される神社がいくつか存在するが、葛見神社が遺跡と最も近接する。その主神は葛見神とされるが詳細は判然とせず、相殿に倉稻魂命、即ち稲荷神が祀られている。この神社の創建年代は不明で古文書・古記録の類は現在伝世せず、神社の沿革は判然としない。ただし『延喜式』卷九の神名帳には伊豆国に鎮座する神社名が列記され、竹の台遺跡が位置する田方（タカタ）郡には廿四座の神社名が挙げられている。その中の「久豆弥（クツミノ）神社」が記載され、この久豆弥神社を現在の葛見神社に比定する意見が大勢を占め、定説化している。前述したように『和名類聚抄』では伊豆国田方郡の郷名を列記しているが、その中に久寝（クズネ）郷が見られる。現在伊東市内には玖須美元和田という地名が残るように（図1）、神社一帯は久寝郷の比定地範囲内であり、『延喜式』久豆弥神社の久豆弥は「久寝」「葛見」等、地名に由来するものと理解されている。

以上のように竹の台遺跡が周知の伊豆国田方郡久寝郷の構成集落のひとつという点、式内社と考えられる葛見神社から約300m以内という至近距離にあり、そして富山県桜町遺跡・島根県青木遺跡の例も勘案すれば、遺跡出土土器に見る墨書「祝」は葛見神社の神職と推

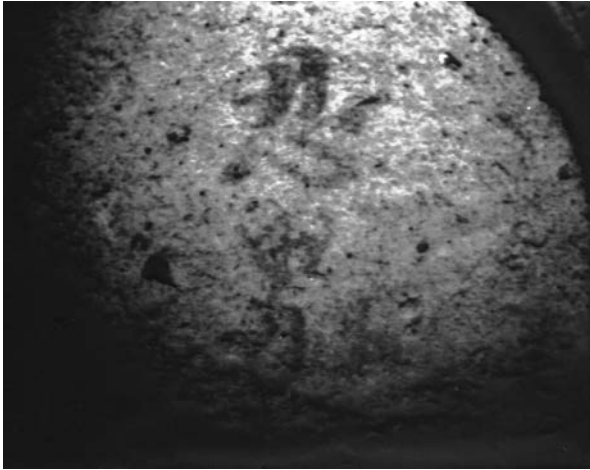


図4 「忍□〔界カ〕」赤外線画像

定することが可能である。さらに職員令神祇官条にあるように「祝」は国司により「神戸」から選ばれた点から、当該遺跡が葛見神社の神戸集落であった可能性がある。伊豆国における神戸は「大同元年牒」（黑板他1967）に記載されたように、伊豆三嶋神に対し、天平寶字2（806）年9月には9戸、12月に4戸寄進されていた。また伊豆国内には鏡作神（鏡作坐天照御魂神社カ）の神戸16戸の記載があり、当該墨書土器群とほぼ同時期の神戸の状況を示している。この「大同元年牒」に葛見神社の神戸にかかる記載は無いが、これには該期（西暦806年）における国内の神戸全てを反映したものではないと考える。

『延喜式』巻九の神名帳で伊豆国賀茂郡には伊豆三島神社・伊古奈比咩命神社・物忌奈命神社・阿波神社、田方郡で楊原神社が名神・大社とし、葛見神社は「大社」とされていない。しかし静岡縣郷土研究協会會の『静岡縣神社志』では「…往古は久須美神社或は久寤大社と稱し、正徳年間には葛見大社とも稱した…」とあり、秋山富南原著の『豆州志稿』（戸羽山1967）には元禄10年（1697）の上梁文を紹介し、葛見神社は鎮座以来度々「大社」と称した時代があったとの記述がある。この点からすれば、墨書土器に見る「大社祝」（おおやしろのはふり）については、伊豆国内の大社の祝を示す可能性の他に、むしろ葛見神社（葛見大社カ）の「祝」を示す可能性がある。先に触れた富山県桜町遺跡出土墨書土器に「長岡神祝」「大祝」「祢宜」「祝」の他に「大社祝」があることから、越中国礪波郡式内社の長岡神社では複数の神職が存在していた可能性があるが、当該葛見神社でも「社祝」以外に「大社祝」が存在した可能性を認める。また「祝」としての格を示す可能性もあり、検討を要する。

（3）「忍□〔界カ〕」

次に「忍□〔界カ〕」を考えたい。前述した「祝」類の墨書土器と異なり1点のみの出土である。1文字目にあたる「忍」は肉眼でも識別が可能である。2文字目は報告書で「界か？」と述べている。「界」の上半部「田」の部分は明瞭であるが下半部は肉眼で判然しなかったため、赤外線カメラでの観察の結果（第4図）、報告者と同様「界」であるという意見を持つ。今後の諸研究者による分析を待ちたいところである。

仮に2文字目を「界」とし、「忍界」とすれば、仏教用語の可能性が想起される。「娑婆世界」と同意の「堪忍世界」という語があるが、『仏教学辞典』の「娑婆」の項で「釈迦牟尼仏が教化するこの世界のこと。sahaは忍、堪忍と訳し、聖者が勞倦を堪え忍んで衆生を教化するから、この世界を忍土、忍界、堪忍土、堪忍界ともいう。また、この世界の衆生は、内には煩惱があり、外には風雨寒暑などがあって、苦しみを堪え忍ばなければならないから、忍土というとする説がある…」と解説（多屋他1999）している。また『織田佛教大辞典』（織田2005）では「此界の衆生は忍て惡を爲すが故に、又諸の菩薩が教化の爲に忍びて勞倦を受くるが故に堪忍世界と名く…」とする。乃ち「忍界」は「娑婆」や「堪忍界」等同意語が多数あることが分かる。さらに経典が漢語への翻訳された際に用語の統一がなされるため、経典毎に用語の使用・不使用の差が明瞭である。『大正新脩大藏經』中の経典で「忍界」が使用されるのが『正法華經』で18箇所、『大哀經』11箇所、『最勝問菩薩十住除垢斷結經』10箇所、『佛說如幻三昧經』8箇所等である（註3）。最も「忍界」を多く使用する『正法華經』は日本国内で最も使用された『妙法蓮華經』よりも早く、西暦286年に西晋の竺法護により漢訳されている。西暦406年に鳩摩羅什により漢訳され現在も使用される『妙法蓮華經』では「娑婆世界」と訳され、「忍界」は使用していない。また西暦668年に釋道世により完成された『法苑珠林』巻第二では、「…名爲三千大千世界。號爲娑婆世界。梵本正音。名爲索訶世界。依自誓三昧經。云娑訶世界者 漢言忍界謂此土人物剛強難忍事故。立名號爲忍」と解説し、娑婆を娑訶世界とし、中国では娑婆世界を「忍界」と呼ぶことを紹介する。ここで注意しなければいけないのが、墨書の内容が「忍界」としても、上記の意そのままに墨書したものではなく、むしろ沙弥・比丘等の仏教者、僧の名と考えられる点である。

(4) 「志都□」「□〔雲カ〕」「□〔浄カ〕」

竹の台遺跡では「志都□」「□〔雲カ〕」「□〔浄カ〕」という墨書土器も出土している。いずれもその意味を特定し得る材料が無い。「志都□」は「しと」「しづ」か。これは伊東市内の大字・小字に見られないため地名ではない。神社に関連する用語の可能性はあるが、今後の分析にゆだねたい。「□〔雲カ〕」も同様である。参考例として近隣では神奈川県平塚市神明久保遺跡で出土例があげられる（青地1989奈良・平安1995平塚市2001）。相模国国府域にあたるこの遺跡で昭和63年に行われた緊急調査（第2地区）により「雲」と墨書された土器20点、「山雲」が1点出土している。調査面積120㎡の範囲の中に竪穴住居跡が35軒検出されており、墨書土器は主に竪穴住居跡からの出土で、全て坏である。「雲」と墨書された土器は相模国府域では神明久保遺跡第2地区の他に1点高林寺遺跡からの出土が伝えられるのみで、国府域内で普遍的に使用・機能した墨書土器では無いことが推定されている。件の神明久保遺跡の「雲」の墨書位置は外面・内面に認められている。この竹の台遺跡における「□〔雲カ〕」は相模国府の例との関係性は希薄と考えられる。

「□〔浄カ〕」は坏体部外面に墨書されるが、天地を逆に書かれている。この墨書は体部外面に墨書されている（表1）。意味は判然としない。

なお伊東市教育委員会による竹の台遺跡の調査では、「祝」「大家」等は見出せておらず（註4）、これらの集落内での墨書土器の偏在性が窺うことができる。

4 神戸集落内での行為

前章までに述べた調査結果や墨書土器の再評価を整理すると、①竹の台遺跡の平成元年度調査区は、式内社葛見神社の神戸がいた集落の一部である可能性がある。②集落内の有力者「大家」や「大社祝」等が参加したある行為に使用された坏類がSB102に複数回にわたり大量に廃棄されたこと。③その行為は8世紀後半から9世紀初頭に行われた。④僧名と思しき墨書土器がある。⑤9世紀以降、調査区内では生活の痕跡が薄くなる、等①～⑤に整理される。

②に示した竹の台の神戸集落で行われた行為について、その可能性を想起することが許されるものならば、まず「郷飲酒礼」が検討の俎上に挙げられる（義江1996）。『令集解』儀制令の春時祭田条には春時祭田の日に飲酒等を基軸とした祭礼が、郷の住民により行われる様が描かれている。ここで『令集解』が引用した

大寶令の注釈書『古記』の文には、村の「社神」の元に人々が集まる祈年祭のようなものとし、郷飲酒礼は郷家に準備するとある。また「一云説」が述べるには、社に「社首」を置き、村人に神幣を輪せしめている。また社首は家毎に稲を出させ、出挙で利益を出して、前もって酒を造り、村人にふるまう食事の準備をする。そして祭りの日に、村人を悉く社に集め、国家の法を知らしめるとある。

しかし平成元年度調査の成果は、春時祭田条にある「社」における郷飲酒礼を直接裏付ける資料ではなく、土師器坏類は住居内へ廃棄されたものに過ぎず、調査区内で神社遺構と呼べる遺構は無い。前述の島根県青木遺跡ではIV区にて神社遺構が確認され、隣接するI区では共同飲食儀礼が行われ、その場で土器が投棄されたと推定し、神社隣接地での飲食にかかる行為が行われていた実例が示された。件の平成元年度調査で確認された大型掘立柱建物跡SH202は、他のSH201・203と比較して、柱穴の平面形が方形、かつ建物跡も規模が大きい点で区別される。この調査区自体多くの攪乱により判然としないが、SH202と竪穴住居跡の間に一定の距離を開けている状況から、想起されるのがSH202は神社建築物である可能性の有無である。件の島根県青木遺跡では方形貼石区画及び総柱建物跡、加えて絵馬・神像及び大量の墨書土器等を含めて神社遺跡として総合的に判断されているのと比較し、件のSH202は規模が他の2棟と異なり、竪穴住居跡周囲に僅かな聖俗隔離を意図した空閑地があるようにも見えるが、SH202には神社遺構として比定しうる材料が無いと言える。前述したように春時祭田条は「社」に参集しての行為であるため、竹の台遺跡で墨書土器を含む土師器坏を多く使用したその行為が、春時祭田条に見る行為には限定できない。祭祀後に行われた直会のような飲食行為と考えておく。

ここで、もうひとつ問題があげられるのが「忍□〔界カ〕」である。僧名であるならば、神戸集落内での仏教活動を認める事になるが、付近に古代寺院に比定される遺跡は見出されていない。伝承で葛見神社の別当職を務めた甕裡山東光寺（廃寺）が、神社に近接する瓶山の麓辺りにあったとされ、現在では法灯を受け継ぐ稲荷山東林寺が神社南方、同じく瓶山の麓にある。その瓶山には12世紀代に東林寺朝日山経塚が造営されている。葛見神社には伊東一族により稲荷神が勧請され、東光寺及び東林寺は伊東氏再興という伝承が残る。近世段階では葛見神社と東光寺は、走湯山の行者による

伊豆峯遍路ルート中の拝所としても機能している（深澤他2012）。葛見神社と寺院との関連は伊東氏の関与を考慮すれば12世紀代まで遡ることができるが、現時点で墨書土器が使用された8世紀代まで遡れる文献資料等は見出されていない。

ここで8世紀代における神社神官層と仏教との関連性が明らかな例として、笹生衛氏が分析した下総国香取神宮及びその神戸集落遺跡がある（笹生2005b）。同神宮神戸大槻郷に比定される吉原三王遺跡に神官層が居住し、他の集落遺跡である多田寺台遺跡や多田日向遺跡・織幡妙見堂遺跡で、8世紀中葉から仏教遺跡や仏堂と考えられる遺構が出現する。これらは墨書土器の内容等から香取神宮神官層である「赤祝連」「中臣部」一族の関与するものと理解される。また香取神宮と仏教施設のある多田寺台遺跡とは約2kmと一定の距離を置くため、神仏隔離への指向性も指摘される。

この神仏習合（吉田1996）は、霊亀元年（715年）の越前国気比神宮寺を文献上の嚆矢とする。養老年中の若狭国若狹彦神社に纏わる神願寺、天平勝宝年中の満願による常陸国鹿嶋神宮寺の開創、天平寶字元年（757）の同じく満願による相模国箱根権現奉斎、天平寶字7年の満願による伊勢国多度神宮寺開創が著名である。竹の台遺跡近隣における神仏習合の動きとして、満願による相模国箱根権現の開創が着目され、また修験・山林修行にかかり役行者の影響も想起される。役行者の伊豆流罪は文武天皇3年（699）で、赦免は大寶元年（701）のことである。このように伊豆国では役行者を嚆矢として、山林修行及び神仏習合のいち早く波及したことが想定される。山林修行を髣髴させる遺跡は河津町の春蔵遺跡があげられる（宮本他1992）。8世紀第3四半期から10世紀前半にかけて継続した集落遺跡であるが、一時期に2軒程度の堅穴住居が営まれ、いずれも転用硯・灯明皿、墨書土器が出土する特殊な遺跡である。また堅穴住居跡2基より9世紀第1四半期と思しき瓦鉢が出土している。さらに読経や写経等を想起させる硯や灯明皿の出土から、春蔵遺跡は山林修行の場で、平安仏を有する南禅寺との関連が想起される（勝又2002・植松2008）。

翻って竹の台遺跡を検討すると、件のSB102出土の墨書土器「忍口〔界カ〕」が僧侶の名を示し、この僧が単身で「祝」や「大家」と共に祭祀へ参加したという解釈が可能ならば、神仏習合の表象化ともいえるべき神前読経が行われた可能性が浮上する。そもそも神前読経は、神々に仏教の經典を奉読する行為である。文献

上では延暦13年（794）に豊前国八幡、筑前国宗形、肥後国阿蘇の三神社で読経をさせるために、少僧都伝燈大法師位の等定が派遣される記事を最古であるが、既に奈良時代から行われていたと推定されている（熊谷1987）。また延暦13年の事例以前から、災いを祓うために奉幣と読経が行われ、同様の意識下で神前読経が盛行したとする（出淵2001）。さすれば葛見神に除災を祈念する神前読経が行われ、その後、祝や僧等、大家等が飲食を共にしたのかもしれない。

結語

現時点においては、竹の台遺跡における平成元年度の調査で確認されたSB102内に廃棄された土器群は、葛見神社の神戸集落内で行われた、複数回にわたる祭祀に伴う直会等に伴うものと解釈され、そこには「大家」や神職である「大社祝」「社祝」が参加したものとする。また「忍界」による神前読経が催された可能性のあることを指摘しておく。

自分は墨書土器について全くの門外漢であり、わずかに「忍口〔界カ〕」という墨書土器を突破口として、いたずらに時間をかけて、まとまりの無い検討をしてしまった。今後、諸氏のご指摘・ご教授を待ちたいと思う。

謝辞

本稿執筆にあたり、竹の台遺跡調査を担当された及川司氏・鈴木良孝氏に感謝申し上げる。また笹生 衛氏（國學院大学）をはじめ、金子浩之氏・杉山宏生氏・浦志真孝氏（以上、伊東市教育委員会）・池谷初恵氏（伊豆の国市教育委員会）・大森信宏氏（静岡県埋蔵文化財センター）には御指導・御協力を賜った。最後にお礼申し上げる。

図註

- 第1図 国土地理院発行1:25,000地形図「伊東」を使用。
- 第2図 報告第4・5・31図等を合成・編集。
- 第3図 報告第17・18・41図を合成・編集。
- 第4図 この写真は、大森信宏氏が当センターの赤外線テレビカメラにより撮影したものである。

註

- 1 SD101から出土した遺物の中に、仏具である瓦鉢に似た資料（第19図8）が報告されている。諸氏と実物を検討した結果、駿東型・甲斐型等同時期の土器群とは異なる胎土であることを理解した。またこの胎土及び口唇部直下の沈線等の特徴が縄文土器に酷似する点等から、

本文ではこの資料の分析を保留した。

- 2 「祝」出土遺跡の検索は、墨書土器・刻書土器のデータは明治大学日本古代学研究所のデータベースを基調としている。
- 3 経典中の単語検索には、大蔵経テキストデータベース研究会（東京大学大学院人文社会系研究科次世代人文学開発センター）のデータと『大正新脩大蔵経』を利用した。
- 4 金子浩之氏・杉山宏生氏のご厚意により、実見させていただいた。

引用・参考文献

- 青地俊郎 1989 「Ⅶ 神明久保遺跡」『平塚市埋蔵文化財緊急調査報告書 2』平塚市教育委員会
- 池谷初恵 1995 「第3節 伊豆国における奈良平安時代の土器様相－三島市壱町田遺跡を中心として－」『大場川遺跡群』三島市教育委員会
- 出淵智信 2001 「神前読経の成立背景」『神道宗教』第181号 神道宗教学会
- 今岡一三・平石 充・松尾充晶 2006 『青木遺跡Ⅱ 弥生～平安編』島根県教育庁埋蔵文化財調査センター
- 植松章八 2008 「静岡県における村落内寺院・仏堂風建物」『静岡県考古学研究』40 静岡県考古学会
- 及川 司・鈴木良孝 1991 『竹の台遺跡』静岡県教育委員会
- 織田得能 2005 『織田佛教大辞典』大蔵出版
- 勝又直人 2002 「静岡県における古代仏教遺物の様相」『研究紀要』9 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 加藤清志 2000 『伊東の地名』サガミヤ
- 木村 博 1987 「葛見神社」『日本の神々－神社と聖地－第10巻（東海）』白水社
- 久々忠義・塚田一成他 2003 『桜町遺跡発掘調査報告書弥生・古墳・古代・中世編Ⅰ』小矢部市教育委員会
- 熊谷保孝 1987 「平安時代前期における神前読経について」『神道宗教』第129号 神道宗教学会
- 黑板勝美・國史大系編集會 1966 『令集解 後編』吉川弘文館
- 黑板勝美・國史大系編集會 1967 『国史大系27 新抄格勅符抄 法曹類林 類聚符宣抄 續左丞抄 別聚符宣抄』吉川弘文館
- 黑板勝美・國史大系編集會 1987 『令義解』吉川弘文館
- 笹生 衛 2005a 『神仏と村景観の考古学』弘文堂
- 笹生 衛 2005b 「東国神郡内における古代の神仏関係－

香取郡・香取神宮周辺の事例から－」『神道宗教』第199・200号 神道宗教学会（笹生 衛 2012 『日本古代の祭祀考古学』吉川弘文館に再録）

静岡県郷土研究協会 1941

『静岡県神社志』（1980年復刻）

関 和彦 1994 『日本古代社会生活史の研究』校倉書房

多屋頼俊・横超慧日・船橋一哉 1999

『新版 仏教学辞典』法蔵館

時枝 務 2009 「木簡と墨書土器の語り」『図説 伊東の歴史』伊東市教育委員会

戸羽山 瀚編 1967

『増訂豆州志稿・伊豆七島志』長倉書店

奈良・平安時代研究プロジェクトチーム 1995

「神奈川県墨書土器について」

『神奈川の考古学の諸問題（Ⅱ）』

神奈川県立埋蔵文化財センター

西田長男 1978 「僧満願の神宮寺創立」『日本神道史研究 卷四 中世編（上）』講談社

原秀三郎 1988 「土器に書かれた文字－土器墨書」『日本の古代14 ことばと文字』中央公論社

平塚市博物館 2001

『平塚市史別編 考古基礎資料集成 3

平塚市内出土の墨書・刻書土器』

菱沼 勇 1981 「久豆彌神社」『式内社調査報告第十卷伊豆国・甲斐国』皇學館大學

深澤太郎他 2012

『伊豆修験の考古学的研究－基礎的史資料の再検証と「伊豆峰」の踏査』國學院大學

宮本達希・長井正欣 1992

『春蔵遺跡』河津町教育委員会

山本幸司 2007 「第3章 古代の伊東と宇佐美」

『伊東市史 史料編 古代・中世』

伊東市史編集委員会

義江彰夫 1996 『神仏習合』岩波書店

吉田一彦 1996 「多度神宮寺と神仏習合－中国の神仏習合思想の受容をめぐる－」

『古代王権と交流 4 伊勢湾と古代の東海』名著出版

【経典】

竺法護譯『正法華經』

（大正新脩大蔵経刊行会 1988

『大正新脩大蔵経』第9巻 所収）

釋道世撰『法苑珠林』

（大正新脩大蔵経刊行会 1990

『大正新脩大蔵経』第53巻 所収）